校 長 室 だ よ り（No.13）

令和４年７月26日
丹波市立黒井小学校長
谷口　千尋

子ども多文化共生教育

学校においても、様々な面で「多様性」を重視することが大切にされています。特に外国人児童生徒に関しまして、本校においても人権教育を軸として、多文化サポーターの支援等を受けながら多文化共生の取組をすすめているところです。

兵庫県においても、平成12年に「外国人児童生徒にかかわる教育指針」が出され、平成15年には、「子ども多文化共生センター」が開設されました。平成27年の調査では、兵庫県内に97,043人の外国の方が住んでおられ、丹波地域にも1,178人がおられます。国籍では、韓国・朝鮮が最も多く、47.5%、次いで中国の24.8%、ベトナム、フィリピン、ブラジルの順となっています。

外国人児童生徒にとっての課題は、まず、言葉の壁が一番大きいと言えます。家族と話すのが母国語で、学校で話すのが日本語の場合、言葉がなかなか定着しないことが多くあります。また、挨拶などの生活に関する言葉は早くに覚えられても学習用語は覚えにくい現状です。そのため学校での支援は、主に学習時間での補助となっています。また、生活習慣や文化の違いもあり、学校給食などの学校生活に馴染めない児童もいます。支援の大切な視点として、日本語を教えることは生活を支えるうえで重要ですが、その子自身の自尊感情やアイデンティティの育成も大切であることから、母語や自国の文化を大切にすることを教えたり、本名（日本名を持っている場合）を名乗りやすくしたりする環境づくりも大切になります。このような外国人支援が、ここ日本では大変充実していると感じます。兵庫では阪神淡路大震災の教訓もあると思いますが、諸外国では、ここまで細やかな取組は見られません。

学校での「子ども多文化共生サポーター」の役割としましては、

１　外国人児童生徒への直接的な支援として
（１）生活適応を図るための支援…保護者も含めてサポーターが支援しています。
（２）学習支援・学習指導の補助…授業にサポーターが入り、通訳等をしています。
（３）心の安定を図るための支援…サポーターが様々な相談に乗っています。
（４）母語・母文化保持の支援…サポーターが母語や母文化を伝えています。

２　教員・保護者と連携した支援
（１）当該児童生徒の教育課題等を伝える…サポーターが学校の行う個別懇談会に参加し、懇談内容を伝えています。
（２）学校からの連絡・説明の補助…サポーターが学級通信や学年通信を翻訳しています。特に新しく日本に来た場合や転入学時には、丁寧な説明が必要になります。

「多様性」を重視することが今後の学校においても大切になってくる中、子ども多文化共生サポーター等の活用が益々重要になると考えます。